令和6年度「飼料用米多収日本一 」受賞者の取組概要

褒賞名	茨城県農業再生協議会長賞
受賞者名	鈴木　秀史
所在地	下妻市
品種名及び作付面積	1,020.27a（夢あおば）
10a当たり収量	715kg
移植日	5月15～25日
施肥（基肥）	5月15～25日　マジ軽一発ドラゴン 38kg/10a （窒素9.1kg/10a）（田植同時）
施肥（追肥）	7月10～15日　空散追肥306　10kg/10a （窒素3kg/10a）
収穫日	9月20～30日
取組内容	**◆経営形態・経営面積・作付品種及び各面積** ・家族経営（本人、妻、母）により、水稲25.8ha（主食用米15.6ha、飼料用米10.2ha）、小麦8.4haを栽培。 ・下妻市 大宝地区生産組合のブロックローテーションの小麦約45ha・そば約40haについて、組合員の一員として共同作業を実施。 ・地域の担い手として、年々経営規模が拡大。R7.1月に常時雇用1名を確保し、今後は秋冬ネギの導入も検討。 **◆多収品種への取組状況（取り組んでいる期間や経緯等）・作付品種及び面積・品種選択の理由等** ・R4、R5は収量性の高い主食用品種で飼料用米生産を行い、十分な収量を確保。 ・飼料用米専用品種「夢あおば」の方が、より収量性が高いとの情報から、R6は飼料用米全面積（約10ha）を夢あおば」に切り替えた。 **◆多収を達成するために取り組んだことについて** （播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組） ・R6.2月に堆肥入り土壌改良資材（稲サポ）45kg/10aの施用、また、生育状況に応じた追肥など、基本技術に取り組んでいる。 **◆生産コスト削減等の取組効果について** ・限られた労力で、収量性を維持しながら規模拡大に対応するため、積極的にスマート農機の導入を図っている。 ・R6には、栽培管理支援システム「ザルビオフィールドマネージャー」の情報を基に、ドローン追肥を実施。 ・R4には、ロボット田植機を導入し※、未熟練作業者でも作業の効率化、適期移植をすることができ、これらの取り組み等により収量性を維持（経営者はR2に就農。田植えは、未熟練者の妻、手伝いの兄も行う）。 ・R7に向け、「良質堆肥広域流通促進事業」を活用し、R6.10月～12月にかけて、地域内の牛ふん堆肥を施用（施用面積 約17ha、施用量 約1t/10a）。 ※茨城県農業総合センターHP「スマート農業導入の手引き 普通作物編（第4版）」19ページ事例

令和6年度「飼料用米多収日本一 」受賞者の取組概要

褒賞名	鹿島地域飼料用米生産利用推進協議会長賞
受賞者名	直井　弘典
所在地	つくばみらい市
品種名及び作付面積	340.31a（みなちから）
10a当たり収量	684kg
移植日	5月4日
施肥（基肥）	4月22日　早生用一発055、中生晩生用一発　混合40kg/10a （窒素12kg/10a） 4月22日　稲サポ　30kg/10a （窒素　0.2kg/10a）
施肥（追肥）	7月6日　硫安　9.5kg/10a （窒素　2kg/10a）
収穫日	9月10日
取組内容	**◆経営形態・経営面積・作付品種及び各面積** ・家族経営（本人（兼業）、妻、父、母の4名および期間雇用2名）による水稲4haの水稲単作経営。 ・品種は「コシヒカリ」0.5ha、「みなちから」3.5ha。 **◆多収品種への取組状況（取り組んでいる期間や経緯等）・作付品種及び面積・品種選択の理由等** ・令和3年度から、米価の変動に対応するため、飼料用米「夢あおば」を導入。 ・令和6年度は、飼料用米多収品種「みなちから」を導入。 **◆多収を達成するために取り組んだことについて** （播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組） ①育苗期間は長めにし（約1ヶ月）、やや大苗かつ健苗育成に努めている。 ②基肥は、窒素の溶出期間を長くするため、2種類の基肥一発肥料を混合して施用した。また、地力向上のため、稲サポを施用した。 ③移植時期は5月初旬。植付本数は5～6本/株にし、コシヒカリよりやや多めに設定。栽植密度は62株/坪。育苗箱の使用枚数は約18枚/10a。 ④生育状況および幼穂形成の時期を確認し、追肥を実施している。 ⑤作業委託により、ドローンを活用したカメムシ類の適期防除を徹底している。 ⑥ロータリー耕は乾土効果を狙い荒起しを実施している。 ⑦茨城県の栽培指導等を参考にしている。 **◆生産コスト削減等の取組効果について** ①低価格帯の肥料を活用することで、肥料費を約2割削減。 ②作業を効率的に行えるよう、農地の集約化を図っている。 ③移植栽培の基肥は、なるべく移植の直前に施用し、脱窒の抑制を図る。 ④代掻き同時播種（湛水直播）に取り組み、育苗にかかるコスト及び労働力を省力化している。 **◆今後の課題、要望** ・米価の変動に加え、資材費や機械代の高騰など情勢が不安定な中、増収や品質・食味の向上を図る。 ・環境にも配慮した農業を実践するために、今後、さらなる土壌改良資材や堆肥等への助成を期待したい。

令和6年度「飼料用米多収日本一 」受賞者の取組概要

褒賞名	協同組合日本飼料工業会企画振興委員長賞
受賞者名	荒井　和浩
所在地	稲敷市
品種名及び作付面積	2,170a（ちほみのり、オオナリ）
10a当たり収量	634kg
移植日	ちほみのり：4月20日～5月5日、オオナリ：5月26～29日
施肥（基肥）	田植同時側条施肥 ちほみのり：スーパーてまいらず早生用　45kg/10a（窒素12.2kg/10a） オオナリ：米アップ 45kg/10a（窒素12.2kg/10a）
施肥（追肥）	乗用管理機を使用 ちほみのり：6月30日～7月2日　オール14　10.7kg/10a（窒素1.5kg/10a） オオナリ：追肥なし
収穫日	ちほみのり：8月15日～9月10日（途中で主食用米等含む） オオナリ：10月7～13日
取組内容	**◆経営形態・経営面積・作付品種及び各面積** ・家族経営（本人、妻、父、母、姉の5名および期間雇用2名）により、水稲約50haの単作経営。 ・地域の担い手として水田の作業受託も行うなど、経営規模の拡大に取り組んでおり、法人化も検討中。 **◆多収品種への取組状況（取り組んでいる期間や経緯等）・作付品種及び面積・品種選択の理由等** ・H30頃から飼料用米として「夢あおば」の栽培を開始。 ・作期分散や耐倒伏性等を考慮し、R4年から「オオナリ」、R5年から知事特認品種「ちほみのり」をを導入。 **◆多収を達成するために取り組んだことについて** （播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組） ・収量を確保するため、適期移植と多肥栽培を基本としている。 ・レーザーレベラーを活用して圃場を均平化することにより、水管理を容易にし、茎数確保や除草剤の効果を最大限に発揮。 ・育苗箱施用剤とドローンを活用した適期の病害虫防除により、収量の確保を図っている。 **◆生産コスト削減等の取組効果について具体的に記載** ・高密度播種とプール育苗に取り組み、苗箱使用数は10枚/10a程度により、育苗作業の省力化とコストを削減。 ・担い手直送の大型規格の利用による資材費の削減、乗用管理機の活用による追肥作業の省力化、立毛乾燥による乾燥コストを削減。 ・地域計画に関する座談会への参加など、農地の集約に取り組む。